

やはり俺の高校生活はまちがい続けている。

さっきのピラニア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、総武高校にいたかもしれない一人の教師の物語。
少し甘酸っぱくて、苦い苦い苦い彼の物語。

原作の雰囲気・設定に違和感や矛盾があるかもなので、受け付けない人はブラウザバック推奨です。

目次

俺はまた、この学校の校門をくぐる。	1
元生徒会長と現生徒会長は結局邂逅する。	4
そして俺は過去に交わった天敵と再会する。	8
何気ない日常は過去と照らし合わせると何とも味気ないものである。	11
彼女は傍観者にならず樂觀的な妄言を吐く。	14
天敵はいつも突然に現れ、ちよつと掻き乱す。	17
沁みついた孤独は、孤立となつていつか顕現する。	20
彼女の優しさは、いつか誰かを救い、そして傷つける。	23

俺はまた、この学校の校門をくぐる。

…この校門をくぐるのはいつ振りだろうか。両手で数えきれない程ではないが久しぶりだ。

少しくたびれた革靴を校庭から飛んできた土煙でざらつくアスファルトを歩く。何度も通ったこの道の感触も久しぶりだ。風向きの関係でざらつくアスファルトも、少し古くなったように見えるこの校舎も。屋上から聞こえるトランペットの音も。後ろ髪引かれるあの日々も。昨日の事のように思い出せる訳ではないが思い出せる。

職員室に向かう廊下は、リノリウムとワックスの独特な香り。開かれた窓からは春の訪れを知らせる少し生暖かい風と、桜の香り。

「…戻って、来たな。」

戻って来ちまったという言葉の方が正しいだろうか。ふー、と大きく息をついて、職員室の扉を開ける。まずは校長と教頭、そして学年主任に挨拶しないとだな。

職員室を見渡すと、一人の先生と目が合う。長い黒髪に白い白衣を着た女性。俺は彼女に、あの頃の面影が見えた。と、言う事は自分の推測は正しいのだろう。俺は少し目を細め、なるべく笑顔を作って挨拶する。

「お久しぶりです、平塚先生。学年主任ってどこにいるか分かります？初めてなもので。」

こちらを見た彼女は目を丸くする。だが直ぐに持ち直して答える。

「…ゆーい、横芝先生か…業務連絡にあったが、ここに赴任してくるのは本当だったのだな。あとその作り笑いと呼び方は止めてくれ、お前らしくない。」

溜息を付いて、平塚先生が言う。

「…さいですか。久しぶりだな。ここでこんな形でまた会うとは思わなかったけどな。で、学年主任がどこにいるか教えてくれないか？挨拶しておきたいんでな。」

「ああ、分かった。」

平塚先生に主任を紹介してもらい、赴任の事務手続きをする。先生

への紹介はまた後日だそう。まだ春休み中で始業式・入学式までまだ数日ある。徐々に慣れていけばいいさ。

俺はあてがわれた物理準備室へ向かう。物理準備室は特別棟にある。春休み、かつ三年生も卒業した事もあり、やたらとこの棟だけは静けさに満ちていた。準備室の扉を開け、席に座る。

県下有数の進学校のこともあり、ある程度授業で説明で使えそうな備品が揃っている。使わなくても受験は突破出来なくはないが、数式を羅列して計算させるだけの授業も味気なからう。始まる授業で使う算段をしていると、扉がノックされガラツと開かれた。

「…ノックくらいしろよ。無遠慮な所は相変わらずだな。」

「まあ、良いじゃないか。知らない仲じゃあるまいし、総武高校元生徒会長さん。」

そう言つて、彼女はニヒルな笑みを浮かべる。先程あつた戸惑いは無いように見える。もしくは隠しているか、だが。

「…そんな昔の話は忘れたよ。副生徒会長さん。」

「良いじゃないか。積もる話や昔話をしようじゃないか。」

「お断りだ。そんな話をして退屈だし、効率的じゃない。」

彼女は俺を眺めながらポケットから煙草を取り出して火を点け、一息つく。俺も続き鞆から煙草を取り出す。

「…キャスターか。良い趣味してるじゃないか。」

「…お前のLARKは少しおっさん臭いんじゃないか？」

「ワイルドで格好いいだろうが！皿田きのこサラダも吸つてたし、おっさん臭くないぞ！」

「そこでアラレちゃんのマイナーネタ持つて来るのはおっさん臭くないか？…つて言うかあれ幼稚園児だからもつとアウトだぞ。」

どうも旗色が悪いと察した彼女は咳払いをし、話を変える。

「…っん！…で、どうだ。久しぶりの校舎は？」

「まあ懐かしい以外に感想は無いな。変わった様な、変わらん様な不思議な感じだ。」

「私も赴任して数年経つが、ここは全然変わらないな。」

「そんなもんか。」

「そんなもんさ。…じゃあ私はこれで失礼するよ。これからよろしく。」

「ああ、宜しく。」

平塚先生は煙草をもみ消すと立ち上がり、扉を開ける。

「そうだ、忠告って程ではないが、今の総武には良くも悪くも面白い奴らが揃ってるぞ特に二年生はな。楽しみにしておくよと良い。」

「了解。楽しみにしておくよ。」

そう言つて彼女は扉を閉める。準備室の中には再び静寂が訪れた。短くなった煙草をもみ消し、短く息を吐く。

あと少しで新学期が始まる。今年も生徒たちの青春を傍観し、少し干渉しながら過ごすのだろう。退屈と言うか、忙しくなりそうだ。

元生徒会長と現生徒会長は結局邂逅する。

特に目立った問題も無く、始業式当日。俺は朝の職員会議で教員達に職員室で自己紹介を済ませ、始業式までの時間潰しに軽く校舎を回る。校舎内には新二年生、三年生しかいないためか、心なしか閑散としている気がしないでもない。誰だコイツと訝しげな視線を向けてくる者、興味なさげに事務的な挨拶をしてくるもの、反応は様々だが、教員の名札を掲げているため、一応は先生だとは認識してくれているだろうか。散歩してるうち、時間も近づいて来たため、赴任の挨拶を頭の中で反芻しながら、体育館に向かった。

始業式は赴任の自己紹介もあったが、特に滞りなく終了した。今日は特に授業もないので、明日以降の授業の準備に勤しんでいた。俺の担当授業は基本的に理系の学生が中心になるため、二年生より上の生徒が対象になる。前任の教師に関しては知らないが、俺のスタイルは受験でもある程度通用する学力を身に付けてもらうことを意識している。生徒のなかに既に受験も意識している人もいるだろうし、これは間違っではないだろう。出来れば全員の生徒が優秀な成績を出してくれば良いのだが、得意不得意もあるし、どうしようもない所はある。総武高校は県内有数の進学校なので、平均的な高校よりは優秀な学生が多いとは思っただけだけでも。

PCでたったかたったか、と小テストの準備をしていると準備室のドアが控え目にノックされる。どうぞ、と声をかけると建付の悪いドアがガララツと開かれた。

「失礼します。」

準備室に入ってきたのは、お下げ髪にヘアピンをした女子生徒だった。見た目からは図書委員をしてそうな雰囲気を感じさせる。ただその表情は少し固かった。

「えつと…」

彼女は口ごもる。もしかすると、授業の準備に少し水を差された不機嫌さが顔に出て、眉間に皺が寄っているのかもしれない。一旦目と目の間を揉みほぐし短く息を吐く。

「すまん。顔が怖いのは生まれつきだ。そこに突っ立っているのも何だし、座ってくれ。」

そう言っただけは立ち上がり、席を引く。

「あ、はい。ありがとうございます。」

彼女は誘われるまま、席に着く。

特にもてなす用意はしていなかったので早めにやっておこうと思いつつ俺は言葉を続ける。

「そっちも緊張しているだろうし俺から話そうか。今日から正式に赴任してきました。横芝祐一です。担当授業は物理、宜しく。」

「あ、宜しく願います…。私は城廻めぐりです。今は生徒会長をやっています。平塚先生に話を聞いてお邪魔させてもらいました。」

最初は辿々しかった彼女は言葉を紡ぐにつれ、それは無くなっていく。これが通常の彼女なのだろう。

「ほーん。と、言うことは俺の生徒会長だった件も知ってるって事か。」

「はい。経験豊富な先生に色々アドバイスを貰って来いって言われました。」

「経験豊富って言われてもなあ…」

確かに俺は総武高校の卒業生だし、生徒会長でもあった。ただそれはもう何年も前の話だ。あの時と今は少し勝手も違うだろうし。アドバイスできることはあるかは不安ではある。事実ではあるが平塚先生は要らん事を言う。後で釘を刺しておかないとな。

あの時の事を思い出す。

生徒会の仲間と過ごした日々。そして彼女たちとの思い出。

若き頃の思い出は今となっては眩しくて、そして今はもう絶対に届かなくて。後悔先に立たず、覆水盆に返らず。伝えたかった想いは勇気が出なくて、理性で抑えつけて、あの場所を壊したくなくて、先延ばしにし続け結局は全て台無しにしてしまった。少なくとも俺の中では。あの時欠けてしまったピースは何年もそのまま埋まらずにずっと心の中の泥の深い深い底に沈んでいて、そして偶に顔を覗かせ

る。過去の自分が今の俺に問いかける。本当に良かったのかと。あのひととの関係を、思い出を断ち切つてしまつても良かったのか、と。大切だと掌で強く握りしめていた宝石は、気付くとその手の中で粉々に砕けてしまつていた。大切だと、誰にも渡したくないと抱いていたあの時もあの想いも、全て自分が壊してしまつた事に事に気付いたとき。酷く狼狽した。あの時の選択は正しかったのだと、自分に何度も何度も言い聞かせた。選択が間違えたことを認めたくなかった。答えは、未だに出ない。

「…あの…先生?」

俺の様子に城廻めぐりが俺に心配そうに聞いてくる。そんな変な顔をしていただろうか?

「…いや、すまん、考え事をしていた。まあ数年前の話だしあまり自信は無いが出来ることは手伝うさ。何かあつたら此処に来てくれれば良い。昼休みと放課後はここにいるだろうから。」

「はい、宜しくお願いします。」

「おう、そのうち生徒会には挨拶に行くよ。その時は紹介してくれると助かる。」

「はい!かしこまりです!」

そう言つたあと彼女は顔を赤くする。彼女なりのユーモアだったのか?それとも今時の女子高生の流行りなのか、思わず苦笑してしまう。俺は小さく咳払いをして答える。

「ん…まあ…わざわざ来てくれてありがとうな。…つと、そういうば入学式の祝辞とかはもう大丈夫か?」

「はい!他の先生に事前に確認してもらつてるので大丈夫です!」
「ならよし、か。あとは物理で質問があれば気軽に聞きに来てくれ。テストの内容までは教えないが、まあ傾向とか対策とか教えるのも吝かではないさ。」

そしてお互い二言三言言葉を交わし、城廻めぐりは準備室から出ていった。こんな所に長居するのも気まずかろう。

胸ポツケから煙草を取り出し火を点ける。バニラの甘味が鼻を抜

け、部屋の中に煙が充満し、そして開け放たれた窓へと流れしていく。さつき、動揺は隠せていただろうか？城廻の様子からだと、隠せていなかったのだろう。

彼女は近くにいるのだろうか？今の俺を見たら何と言うのだろうか？

変わらないね、と取り繕い。過去の事は水に流し、昔話に花を咲かせる？他人と無視して歩き去る？…もしくはあの時の答えをもう一度問いただしてくる？

分からなかった。卒業してから連絡も取っていない。お互い気まぐさから連絡を絶ってしまい意地を張り続けたまま此処まで来てしまった。彼女は引きずらず先へ歩んでいるのだろうか？

短くなった煙草をもみ消し、再度PCへ向かう。目の前に並ぶ文字列は一向に数を増やさず、無駄な時間ばかりが過ぎていく。どこかの鳥の鳴き声が、俺を嘲るように鳴いている。そんな気がした。

そして俺は過去に交わった天敵と再会する。

放課後。ノックもせず扉が無遠慮に開かれる。いつもの平塚先生かと思いい目を向ける。がそこにいたのは見知らぬ人物だった。

「こんにちは〜♪」

現れたのは髪は肩口まで程よく切りそろえられたモデルの様な美人。服装もカジュアルながら育ちの良さを感じさせる。

「…誰？」

「この卒業生ですよ。静ちゃんからちよ〜つと話を聞いて、何となく来ちゃっただけです♪…あー！」

彼女は唐突に驚いた声を出す。

「それでそれで、今気づいちゃいました。覚えてますか？林間学校。」

林間学校と聞き記憶を巡らせる。彼女を見て思い出したのはずっと昔の事。

高校時代に参加した林間学校の事だ。ボランティアと言うことで生徒会の一部が駆り出された。まとめ役つてことで俺はほぼ強制参加だったが。

彼女はその見た目と性格からずつと子供達の中心にいて目立っていた。快活な笑顔で皆と談笑していた。

ただ皆の視線が外れた時、一瞬だけ冷めた眼差しでどこかを見つめていた事を覚えている。

そして俺がその眼差しを見ていた事に気付いていた。彼女はすぐに表情を変えて皆の輪の中に戻っていた。笑顔という仮面を張り付けて。

その日の夜トイレに向かうと、彼女は何故かそこにいた。

「私のこと見てた？」

彼女は問う。その問いかけはあの笑顔を張り付けた普段の彼女、という意味ではないだろう。すうつと冷たい、品定めをするような目が物語っていた。俺は彼女の質問に素直に答える事にした。

「そりゃあれだけ目立ってたら嫌でも目に付くさ。」

「…ふん、ちゃんとは答えてはくれないんだ。」

彼女はその底冷えのする様な視線を俺に向け続ける。

「…そんな目しなくても何も言わないさ、お前に干渉するメリットは無いしな。そんな事より早く寝な。良い子はもう寝る時間だぞ。」

「ちゃんと答える気はいつも良い子にしてるんだから。今夜くらいは悪い子で良いでしょ。ケチ。」

そう言っつて口を尖らせている彼女は年相応の少女だった。

「ハハッ。」

「何？何が可笑しいの？」

彼女は怪訝そうな瞳でこっちを睨みつける。

「いや何でもないさ。ちゃんと子供らしい表情もするんだな、と思っただけだ。」

「貴方も子供でしょ。」

「そうだな。子供だな。何も知らない。何も分かってない子供だな。」

ちよつと不安そうな表情を滲ませながら問いかける。

「貴方は私を見てどう感じた？」

「…世間一般的には人気者って感じたな。」

「そうじゃなくて。そんなつままない答えなんて求めてない。」

そう言っつて俺を見つめるその大きな瞳は、何故かやたら真剣だった。

「…そうだな…何かを少し諦めて、つまらなそうだと俺は感じたな。何も不満は感じない生活だろうに。」

彼女はキョトンとした表情で答える。

「貴方もそれは感じてるんじゃないの？それをどうして私に聞くの？」

何も答えられなかった。俺はたぶん苦い顔をしていたと思う。

「…面白い人。」

そう彼女はにっこりしてそう言った。

「またどこかで会えるといいな。こんな風に話せる人はいないから。」
「嫌だよ。俺とお前が関わるのは林間学校これっきりだ。」

じゃあな。早く寝ろよ。

そう言つて俺は話を断ち切つてその場を去つた。出来ればもう会いたくないな。心の中で思いながら。

現実に引き戻される。

確かに似ていた。あの時の少女に。ただ今の見た目は完全に大人の女性だった。

しかし今俺を見つめている彼女の、俺の何かを見透かしたような、あの底冷えする、品定めをするような瞳は変わらなかつた。

「…変わらないな。」

俺は小さく呟いた。その言葉は彼女には聞こえていたらしい。

「変わったわよ。美人で妙齡の女性になつたでしょ。…貴方も少し変わった。…ちよつとつまらなくなつた。」

何が変わったというのだろう。何年も前にちよつとだけ会つただけだというのに。

「何も変わらないさ、ただ少年から年を食つたおっさんになつただけだ。」

「そんな事ないよ。私、人を見る目も人一倍あるんだよね。」

そう彼女は自信ありげに語る。先程と違つた快活な表情をケラケラと浮かべながら。

「じゃあ私はここでお暇します。また来ますね、先輩♪」

そう言つて彼女は去つていった。…結局何だつたのだろうか。そういうえば名前聞くの忘れたなあ、後で平塚先生に聞いておくとしようか。

何気ない日常は過去と照らし合わせると何とも味気ないものである。

今日も今日とて、いつもの準備室で業務を片付けていた。

教師というのは、訳分からん雑務が多い。部活の顧問やら保護者の対応やら生活指導やらでまいつちんぐである。まいつちんぐって今日日聞かん。もう死語か。

それに加えて授業の準備もしなければいけない。とはいえ赴任初年度だからなのか、俺が何かしら無言の圧力を感じさせているのか。他の教師達は相も変わらず職員室で仕事をしているのだろう。

俺がここで作業しているのは教頭や学年担当に雑務を任せられるのを避けるためと、早く帰っても目立たないからであつたりする。どっちにしろ早く帰ると陰口を言われるのだから、直接言われづらい場所にいた方が精神衛生上良い訳である。労働と人間関係の闇は深い、そして不快。

そんな要らんことを考えているうちに、雑務と明日の授業の準備を終える。さ、帰りますかね。できれば陽が落ちる前に帰宅するのが俺のMOTTOである。ホットモットのから揚げって美味しいよね。

今晚の夕食がほぼ決まったので、手揚げかばんを引つ提げ扉を開けると同時、隣の扉も開く。

隣の教室から出てきたのは3人組。決してズッコケな彼らではない。

2年の比企谷、雪ノ下、由比ヶ浜である。

パツと見、不思議な組み合わせである。特に比企谷。平塚先生曰く、ふざけた作文を書いた罰として入部させた、との事らしい。

彼の作文を見せてもらったが、まあ中々に歪んでいたというか何と
いうか。

高校生でここまで確固たる意志？ 僻みを感じさせる文章を書くのは面白いなと思う。が、流石に学校に提出する文章かと言われれば疑問である。こういう所でしか他人に真面目に見てもらえないのは

分かるが、普通はもつと当たり障りのない作文にするだろうに。

成績に関しては詳しくは知らないが、文系がともかく理数系は壊滅的な成績であるという話の様である。確かに物理の結果も平均からは大きく下回っているので教師としてはもう少し頑張つて欲しい所ではある。

次に雪ノ下。とはいえ彼女は特段言う事は無かつたりする。授業態度も真面目だし成績も優秀、偶にいる優等生という印象である。多少友達付き合いが苦手そうな所もあるが、それも生徒の個性である。教師が口出しすることでも無かろうに。

あとは先日準備室に来た彼女、もとい雪ノ下陽乃（後で平塚先生に聞いた）の妹である事位だろうか。見た目はともかく、両極端な性格を感じさせる姉妹ではある。

最後は由比ヶ浜。最初視界に入った時にはドキリとした。何と言うのが適切だろうか分からないが、雰囲気似ていた。あの時の彼女に。見た目は大分違っているけれども。

教師という職業柄、そういうった人物がいけないわけではない。その度に動揺してしまうのは、あの時刺さった心の棘が疼くからだろうか。

あと授業中に問題を出したときに一番最初に手を挙げて、見事に不正解を叩きだすのは止めて欲しい。もしくはきちんと予習をしておいてほしい。

「あー！ゆーいち先生だ！こんにちはー！」「こんにちは。」「うす。」

「お、部活終わりか、お疲れさん。あと下の名前で呼ぶのは止めなさい。横芝先生だ。」

生徒達は三者三様の挨拶をする。

「先生も帰りなんですか？」

「そうだな。」

比企谷が問う。

「意外ですね。教師って遅くまで残業して草臥れてるイメージですし。平塚先生とか。」

確かに生徒が教師を見て感じる事はそうなのだろう。そして間違っていない。

「確かに。俺は特殊なパターンかもな。一応忠告しておくが教師になるなよ。残業も多いし良いことが無い。しかも世間知らずの教師しかいないしな、俺含めてな。」

「それが分かっているなら世間知らずって訳じゃないんじゃないんですかね。知らんけど。」

彼はフォローかも分からない軽口を返す。隣で女子組は苦笑いである。

ズッコケていない三人組とは早々に別れ、バイクに跨りエンジンをかける。何年も前に数えきれない程通ったこの道も、今も変わらずそこにある。思い出と後悔を置き去りにして。

辛かった事もいつの日か良い経験になるとは誰が言ったのだろうか。乗り越えられれば正しいのだろう。割り切れればそれも良しだ。：じゃあ未だに引き摺り続けている者は？

伝えられなかった想いも、間違った選択も全て自分がしたことだ。煙り続けグズグズに詰められてしまった諦観すらできない大人を誰か大馬鹿だと笑ってはくれないだろうか。

耳障りなエンジン音だけが俺の耳にはずつと響き続けていた。

彼女は傍観者にならず楽観的な妄言を吐く。

とある放課後。

「邪魔するぞ。」

「ああ。」

お互い語るわけではなく、煙草に火を点す。特に何を語るわけではなく準備室の中には静寂が満ちていく。

遠くから聞こえる部活の音。擦れ合う木の葉。そして隣の女子生徒の話し声。

俺は声のする方へ目をやった。とはいってもそこは壁しかないのだけれど。

「…少し似ているか？彼女は。」

「まあな。」

平塚先生は口を開く。

「春とはもう会っていないのか？」

「まあな…」

「一度もか？」

「…そうだな。」

「何度でもやり直す機会はあったはずなのにか？」

「そうだ。」

彼女が言うとおりにやり直すチャンスはあったのだろう。残念だったねと有耶無耶にして、もう一度積み上げて、そしてきっかけを見つけて踏み出す事が。

けどもう時間が経ちすぎた。バラバラになったあの関係を、今更積み上げ直すなんてもう出来るとは思えなかった。

余りにもコスパが悪すぎる。苦労が多すぎる。心のハードルが高すぎる。そうやって気持ちに区切りを付けて、付けたと思いついて今までやってきた。今更俺にどうしろというのだろうか。

「お前は会っているのか？」

「偶にな。相変わらず元気でこっちが疲れる位だ。」

「いいや。幾度か考えた事はあったが、私の領分じゃない。ただ…」
彼女は少し言葉を詰まらせて続ける。

私を見たとき凄く悲しい表情をするよ。私になるべく見せないようにな。

俺たちの関係は既に崩壊している。時間が経って風化して。今となっては只の思い出の一ページ。思い出、という言葉はとても綺麗な言葉だ。そして残酷だ。どんなに神様に願っても大金を出しても戻ってくることはない。今とのギャップに絶望し、未来に思いを馳せ、そしてまたページを刻んでその残酷さを再認識するのだ。

「楽しかったな、あの頃は。」

「そうか？ 雑務に振り回されっぱなしだった気がするな。」

「そうか？ 少なくとも私は楽しかった。」

そう言っただけ彼女は二本目に火を点ける。

俺は壁を眺めながら呟く。

「あいつらはどうだろうな。どんな終わりを迎えて、どう受け入れるんだだろうな。」

「さあな。それはあいつらは次第だろうに。ただ…」

彼女は俺を悲しく眺めながら続ける。

「私達みたいな、一番糞つたれな、そんな悲しい終わり方を私は絶対に許さないしさせないさ。」

そう言っただけ大きく紫煙を吐き出した。

その言葉は俺達の事情を全て知っている彼女の、昔、隣を歩き寄り添い合っていた三人の、そして俺の、俺達の選択を咎めているようだった。

「俺はあの時折れちゃったんだよ。何でだろうな。何で間違っちゃったんだだろうな。お前もそうだろう？」

「…そう…かもな。でも私にはどうすることも出来なかった。…あの時の私も間違っただけだろうな。」

「…」

「だからこそ、あいつらには間違っただけほしくない。そしてお前にも。まだ取り返せると、私は思っているよ。」

「…」

既に間違つた自分に間違うな、とは酷すぎる要求だ。過去に戻れと言うのか？今から踏み出せというのか？勿論後者だろう。

取り返しの付かない事はきつとある。そしてこれは関係者が納得してしまえば、心で折り合いを付ければ済む話ではないのか？

でもその関係者である彼女は未だに納得していない。二つの線が再び交わった、この学校、この状況だからこそ、何とかなると樂觀視しているのではないかと疑ってしまう。もう一つの線を、彼女が交わらせようとしている作為を感じさせる。今更何が変わるといふのか。全員の状況も違う。立場も違う。大人になった、社会人になった、もう学生気分ではいられない、何かを皆でやる理由も時間も無い。無い無い尽くして全部違う3人で何が変わるといふのだろう。ピースを揃えても今更彼女の思い描くパズルは完成しない。またその交わりはすれ違って、また心に消えないタールの様な、どす暗い諦めを増やす位なら。俺は何もしたくない。俺はもう間違えたくない。

思考が上手くまとまらないまま。消えかけていた煙草の火をいつもより強く磨り潰した。

天敵はいつも突然に現れ、ちよつと掻き乱す。

とある週末

チャイムが鳴る。

俺は特に確認せずに扉を開けた。どうせ宅配便か何かだろう。

扉を開けると肩より少し高めに切りそろえられた、美人がそこにいた。先日準備室に現れた雪ノ下陽乃である。

彼女を認識するや否や、俺はすぐさま扉を閉め…、ようとしたが阻止された。

閉めようとする俺と開けようとする彼女の鏝迫り合いが始まる。

「そんな全力で閉めること無いじゃん！可愛い後輩が来ただけじゃん！ちよつとぐらいお邪魔しても良いじゃん！

「お邪魔するんじゃないじゃなくて邪魔しに来てんじゃないか！そもそも呼んでも無いからな！」

結局身体を扉に挟まれ、家への侵入を許してしまった。立派な不法侵入である。

侵入を果たした彼女は満足気な表情ながら、ぜえはあ、と彼女は少し息が上がっているようだった。

「…ふう。全力で拒絶することは無いんじゃないかな？」

なんか彼女がぶつくさ言っていた。

「全力ではないな。99%くらいだ。」

「ほぼ全力じゃん！」

彼女の文句は適当に受け流し、俺は諦めて部屋へ戻る。お邪魔しますと特に悪びれる様子もなく部屋に入ってくる。

誠に遺憾ながら、一応来客ということで茶ぐらいは出してあげなければいけないか。

俺はキッチンでコーヒーマーカーにカップをセットし、ボタンを押す。豆が挽かれる機械音、乾いた焙煎豆の芳香が僅かに広がった後、蒸らされたコーヒーの香りが部屋の中に充満していく。

部屋に戻ると、彼女はソファアに座り周りを見回しながらニマニマ

している。何が楽しいのだろうか。

「ほらよ。」

「お、ありがと。意外と優しいんだねえ。」

「招かれざる客だが形式上はもてなすさ。それ飲んだら帰れ。」

「え、釣れないなあ。」

多少の不満を口にしながらコーヒーに口を付ける。飲む姿はやたら様になっているのは、カリスマ性のある人間特有のものなのだろうか。

「で、どうして来た？教えてもいないのに。」

「それは企業秘密♪理由はな・ん・と・な・く♪」

軽く笑みを浮かべ、秘密めかした様に彼女は言う。教えてもいない人物に家知られているのは普通にホラーなんだが。

ソファアの横に目を向けると、見知らぬそこそこ大きなカバンが置いてあった。本が入っているのかずんぐりむっくりしている。中々に重そうだ。

「ん、ついでに課題でもやろうかなって思つて。」

「ええ…」

ふ、と俺は大きいため息をつき、ベランダの扉を開け煙草に火を点ける。一口付け肺に回し、大きく吐き出す。吐き出された紫煙は空気に混じり、溶けて無くなっていった。

「え、先輩って吸う人なんだ、私煙草嫌い。」

不満を口にする彼女ではあったが、机には既に資料が広げられ、既に居座りモードである。本当に帰って欲しい。

「嫌なら帰れ。というか帰れ。」

「酷い。」

「静ちゃんとはどういう関係？元恋人？あ、でも静ちゃんの好みっぽくないから違うかもなく♪」

彼女は冗談なのか本気なのか不躰に聞いてくる。普通に失礼ない応後輩である。

「…只の元クラスメイトだ、あと成績で張り合っていたな。国語だけだったが。」

高校時代、平塚先生と俺は国語の成績で張り合っていた仲。というのは一般的な認識だと思う。

…とは言っても意識していたのは彼女だけだったし。他の成績では俺が圧倒していたわけではあるのだけれど。

「ふくん勉強は出来たんだあ。そんな雰囲気はしてたけど。」

彼女は興味なさげに資料片手にペンを走らせ続けている。

「ホントくに静ちゃんとは何もなかったの〜？ 気になっちゃうな〜♪」

「彼女とは何も無かったよ。変な事聞くな。」

『彼女とは』って事は他の人とは何かあったって事なんだ♪」

彼女の言葉に煙草の灰を取り落とす。落ちた灰は砕け、足元へパラツと散らばっていく。

彼女は正解したのが

嬉しかったのか、ニンマリと上機嫌にこちらを見つめていた。

「…これ以上は聞く気なら本気で部屋から叩き出すぞ。」

「おお怖い怖い。これは熱りが冷めてからにしよう♪」

「熱り冷めても話さねえよ。何もなしな。」

そう言っただけ俺は2本目に火を点ける。次は彼女は何も言っただけだった。

しばらくの静寂、部屋の中に響くのは彼女のページの捲る音と、ペンを走らせるサラサラとした音だけだった。

俺は手持無沙汰に彼女の横の本を開く。中身は建築関係の参考書の様だった。

彼女はしばらくレポートを書いた後、コーヒーの例を言っただけで帰って行った。また来るから、との言葉を残して。

彼女が部屋に残した仄かな香水の香りがやけに鼻についた。

沁みついた孤独は、孤立となつていつか顕現する。

あの頃はボツチなんて言葉は生まれていなかった様な気がするが、現代の価値観に照らし合わせるとボツチだったのだろう。

ボツチを孤高なんて言葉に置き換えて大人ぶった記憶もないが、自然とそうなのである。ボツチはボツチの素質があるから

ボツチになる。もしくは学校という社会の中で共存する必要がないからボツチになる、そういうもんだらう。

特に誰と仲良くなるでもなく、体育でペアを組む相手が居なかったりはしたが、特に問題は無く学校生活は続いていく。

世界は灰色だ、と誰かが言った。確かにそうかもしれない。他の人は世界は鮮やかに色づいている、と言った。ただそれは網膜を通して脳に届く光の波長でしかない。その光がどんなに強くたって鮮やかだって。その人の心に灰色にしか映らなければ灰色なのである。どんなにつまらない世界だったとしても。その人が美しいと感じれば、その景色は美しいのである。俺は前者の人間だ。世界は灰色で。何となく他人事で。俺が居なくても世界は関係なく回っていて。

ただ一人、彼女を除いては。彼女は何故か俺が居なくても回っていて世界を許してはくれなかったのだ。

彼女は只のクラスメイトだった。容姿も良く、嫌みも無く、クラスで上手く立ち回る事のできる稀にいる人気者。そしてそんな彼女は皆と仲良くしたかったのだと思う。

皆と仲良く、それは理想論だ。その輪の中に入りたがらない者もいる。入りたくても弾き出される者もいる。学校の教室というコミュニティは一つの社会だ。年端もいかなない高校生にとっては、社会のほぼ全てと言っても差し支えないかもしれない。そんなコミュニティから弾き出されている俺を見て、彼女は救い出したかったのだろう。それを許さない者もいる。元からそのコミュニティにいた人達である。雰囲気を作り、その雰囲気に同調しない者を村八分にした者たち。彼らには悪気はない。学校社会での生き方の一つだから。それは学校の中で暗に認められているルールだから。最初からその輪に

いる人間が部外者を輪に入れようとしても、その輪の中の者が許さないのはその輪の中の者で、あぶれる者が出るかもしれないから。人間関係というものは強固ではなく、曖昧で脆弱でなんとなく結びついた関係でしかない。金属結合の自由電子くらい付かず離れずを繰り返す。そのとき心地よい自分の居場所を探し続け、離れ、そしてまた探す。

彼女は積極的には誰とも話をしてこない俺に話しかけてきた。話すのは何気ない日常の会話。

クラスに溶け込ませたかったんだと思う。俺はその気は無かったので特に現状は変わらなかつたのだが、けれども。

ただ一つ気になる点はあつた。偶に俺が見ているが見ていない時があるのだ。

何かに思い馳せるような、何かを躊躇う様なそんな瞳だつた。

「祐くんは昨日のテレビ見た!?私はさー、ー」

彼女はその後俺に話しかけてくるようになった。

過去そういった人もいた。でも次第に興味を失って離れていった。

彼女もその一人だろうと特に気にも留めることはしなかつた。

彼女の行動が、俺の存在が、クラスでの歪みを生じさせるのは必然だつたのだと思う。

所謂イジメである。俺は特に気にも留めなかつた。行動と人間関係を考えれば、そういったターゲットになるのは俺でも分かる。だからクラスの大多数はターゲットにならない様、注意深く、そして狡猾に自分の存在を隠し、紛れ込ませて生活するものである。俺はそれが性に合わなかつた。中学でも同じ事はあつたし、それはいつか飽きられ、そして他の人間へと移っていく。偶々今は自分というだけなのだ。円滑な学校生活という枠に収まらない人間は大なり小なり、遅かれ早かれそんな番が回ってくるのだ。

彼女はそれを許しはしなかつた。イジメは良くない。それは正論であるが詭弁だ。相対的に誰かを下に見る甘美さは何にも替えがたい。彼女の立ち回りに対して、やはりクラスメイトの反応は冷やかかで変わらない。そしてその行動は何も解決にも至らない事を彼女

は知っているのだろうか？

俺は彼女に言った、そんな事をする必要なんてないと、これは普通に起こる事なんだと。

こちらを気にしている様子ではあるが、クラスの歪みはいずれ無くなっていく。俺という存在を学校という狭く、学生には余りにも広い空間から弾き出す事によって。

彼女の優しさは、いつか誰かを救い、そして傷つける。

その後、クラスの歪みは徐々に収まっていった。

彼女はこちらを気にする様子もあつたが、特に話をするこもなく、少し昔へと戻っていく。お互いに元通りになっていく。俺はいつもの平穩に。彼女は楽しい学校生活に。

数日経ち、とある日の下校途中、俺を呼び止める声があった。振り返ると、そこに居たのは彼女だった。少し息を切らして彼女はそこに居た。

「祐くんはこのままで良いの?」

「このままって?」

「クラスでの事。本当に良いの?」

「問題ないな。こういうった類のモノはいつか終わる気にするのも時間と労力の無駄だろ。」

俺たちは並んで帰り道を歩く。あまり時間は経っていない筈なのに、話をするのは久々な感覚がした。俺はここにはいけない。元の形を取り戻しつつあつたクラスをまた歪めてしまうわけにはいかない。俺はそう思い、足を早め彼女から離れようとした。

「…あのね。聞いて欲しい話があるの。つまらないかもだけど。」

中学時代、学校で虐められていた人がいたこと。彼女が庇つた事。彼女が庇つたのは脅されていると勘違いした人達が更に虐めを加速させたこと。

そして、その人が耐え切れずに自殺してしまった事。

「彼が死んじゃつたのは私のせいじゃないのかもしれない。でも偶に思うんだ。もしかすると私のせいかもしれないな、って。本当はどうしたら良かったんだろう、って。」

彼女は話をした後、あはは、と誤魔化すように笑つた。そしてごめんね、と付け加えた。そして面倒な事を言う女の子だとも。

「だからさ、ほっとけなかつた。祐くんがそんな風に居なくなつちやつたら嫌だな、って思ったの。ただそれだけ。」

夕暮れが徐々に沈み始めた校内で、足をぶらつかせている彼女の表

情は少し影を落としているように見えた気がした。俺は一つ深いため息をついた。

「そうだな、つまらない話だったな。」

彼女は目を丸くして俺の方を向いた。彼女の様子気にせず続ける。「ソイツには自分の問題を解決する力が無かったただけだ。対抗する若しくは、逃げる勇気がやり過ぎす度胸無かったただけだ。先生に相談する、親に言って転校する、選択肢は多くあったはずだ。ソイツは一番やっちゃいけない復讐をやったわけだ。ソイツにとっては今の苦しみから逃げられるし、虐めた相手には心の傷を与えられる。でも、ただそれだけだ。それ以上もそれ以下もない。問題が消滅したただけだ。解決はしていない。」

「でm「お前が気に病む必要はないさ。お前はソイツを庇った。恨まれる筋合いはないだろうさ。」

彼女に必要なのは強い否定なのだと思う。彼女の後悔の否定。

そしてその言葉はあぶれた側の人間から与えられないと、彼女は納得しないのだろう。彼女は多くの人から慰めを貰っただろう。でも彼女は後悔をし続けている。学校というコミュニケーションからあぶれたとはいえ俺でなくても良いのだろう。いつか俺じゃないあぶれた誰かからその言葉は与えられるだろう。ただ彼女が暫く引きずり続けるのを見るのは気が引けた。あと、俺に纏わり付き続けられるのが厄介だったからという打算もあつただけけれども。

そして一つ付け加えた。

「あと、俺はソイツとは違う。もし俺がそんな立場でも気にする事は無い。絶対にな。」

「…」

「だから俺の事も気にするな。そしてお前が好きなようにやればいいさ。これからもな。」

「でも…」

「それならまた俺は否定してやる。お前の責任じゃないってな。」

「…あはは、それでも、私にはそう見えるの。」

「…そう見えるのはお前だけだ。」

「そうかな?」

「そうだ。」

俺たちの間に沈黙が流れる。彼女は優しい人間なんだと思う。ただ自分の持つ価値観に当てはめて哀れんで、そして救おうとして失敗して。

小さい頃はその方法で救えた人もいたのかもしれない。でも救えない人間もいる。死んだ彼や俺のように。選んだ人間と周りの人間に恵まれなかった。それだけだ。

「ま、でも。」

俺は続けた。

「そんな顧みない優しさが何時か誰かを救うのかもな。」

彼女はまた誰かを救おうとするのだろう。上手くいつたり上手くいかなかったりして。そこで色々分かって大人になっていく。特に救えない人間が溢れていることに深く失望して。

「…じゃあさ。」

「ん?」

「私はこれからも私のやりたい様にやらせてもらうよ。それが貴方には好ましく見えなくてもさ。」

「そうか。俺は巻き込まないでいけると助かる。」

「それはどうかな?」

彼女は子供っぽい悪戯めいた表情をしていた。

「あと、ありがとう。」

「…どういたしました。俺は何もしてないけどな。」

「良いの、私がそう言いたかっただけだから。」

柔らかな微笑みをして彼女はそう言った。

「さいですか。」

俺はどんな表情をして答えていたのだろうか。いつもの無愛想なものだっただろう。

歪んだ俺の青春のページは進んでいく。大きな波もなく、凧いだ海のように。

平穏な日常が続けば良いなと願いつつ。俺たちは互いに帰路につ

いた。